

あなたと町を結ぶ情報紙

広報 しんち

10

1997. No.316

農業に新風
吹き込め！



● 特集

- 新たな農業への挑戦
- 在宅福祉を支える

職業として農業を選んだ！
ブルーファンタジーの出荷に追われる
水戸 真吾さん（19歳・杉目）



▲3.2ヘクタールのガラスシャトーで糖度の高いトマトを栽培

平成七年七月、鹿狼山のふもと駒ヶ嶺赤柴地区の旧果樹園地跡に幅百八十メートル、長さ百七十六メートル、面積三・二ヘクタールという日本最大のガラス温室が出現しました。温室を訪問すると、順調に生育した苗が温室いっぱいにトマト独特のツーンとした香気が漂っています。

「ガラスシャトー（ガラスの城）」は、施設園芸の先進国・オランダで生まれた巨大なガラス温室です。平地の多いオランダでの農業は風との戦いであることから、ダブルフェンローダーと呼ばれる二つつなぎの強

オランダのような農業をしたい

今田は農業特集をお送りします。

栽培、企業的な農業経営を進める

農業生産法人(有)新地グリーンファーム

■特集・新たな農業への挑戦①

日本最大のガラス温室でトマト

「日本でオランダのような農業をしたい」とオランダから資材を輸入し、日本一巨大なガラス温室でトマト栽培に挑戦している高橋良行さん

(農業生産法人(有)新地グリーンファーム)をはじめ、町内には農業にならぬ情熱を燃やし続ける人達がいます。

取材を通じて、それぞれが独自の農業哲学を持ち、独自の農法を実践し、さらに、あるべき農業と食のありかたを追求しているようにみえました。

県高校秋季軟式野球大会 新地高、2年連続優勝！

“部員わずかに9人全員野球”で快挙



第三十回県高校秋季軟式野球大会が九月十五、十六の両日、植葉町のならは球場で開かれ七回裏、エース愛沢慶信君は二死一、三塁と、この試合初めてのピンチを招きましたが、最後のバッターを落ち着いた投球で三邪飛に仕留め、ゲームセット。部員が一年生四人、二年生五人の九人ギリギリ、まさに全員野球で手に入れた優勝でした。

「昨年の初優勝も十人だけ。いまさら嘆くほどでもないが、しつかり基礎プレーに徹し、一人のケガ人も出さないよう練習した」と昨年は、十人野球で臨み初優勝し、男泣きした菅波智之監督(二十七歳、写真左端)は今年静かに感想を口にしました。十月十八日から秋田県の八橋球場で行われる東北大会でも、新地旋風を巻き起こすことを期待しています。

化ガラス屋根を梁で支持する構造となっています。風速六十メートル、積雪一メートルまで耐えられるといいます。最新式のコンピュータ制御システムを完備し、天窓や遮光スクリーンの開閉はもとより、暖房設備、灌水施肥設備に至るまで、一切がコンピュータで自動的に制御されています。事業費は約六億円。このガラスシャトーを経営しているのが、農業生産法人(有)新地グリーンファーム(高橋良行社長)。高橋さんは、駒ヶ嶺町は月館町に生まれ、東京農大で畜産を専攻しました。そんな高橋さんが施設園芸に取り組

むようになったのは、以前勤めていた県内の農業関係の物産会社が多角化対策で園芸に着目し、その責任者としてオランダなど欧州を視察してきたことがきっかけでした。

「『旨さ』ほど説得力のあるものはほかにない

トマトを選んだのは人気漫画「美味しんぼ」のトマトの記事がヒント。そしてビジネスマンの経験から、トマトの差別化を図るため、ポイントを「味」にしぼりました。「トマトは野菜と果物の中間物ですが、日本人は果物的感覚で生で食べます。そこで甘くておいしいトマトならば高い評価を得られるのではないか」と。だつたら、食べてすぐにうまいかまずいか分かるものがいい、「旨さ」ほど説得力のあるものはほかになく、ほとんど農薬を使うことのない農法なら、もうひとつ「安全」というかけがえのない価値も獲得できる」と高橋さんは考えたのです。さらに、新地町は冬の日照時間が長く、降雪が少なく、四季を通じて温暖な気候であり、土質もトマトの生産に適していることが分かりました。

もう一つの大きな理由としては、四ヘクタールの農地を借り



▲広いガラスシャトー内の移動は自転車が使われる



▲トマトの芯止め作業を行うスタッフ

**環境にやさしい
独自の循環型農法**

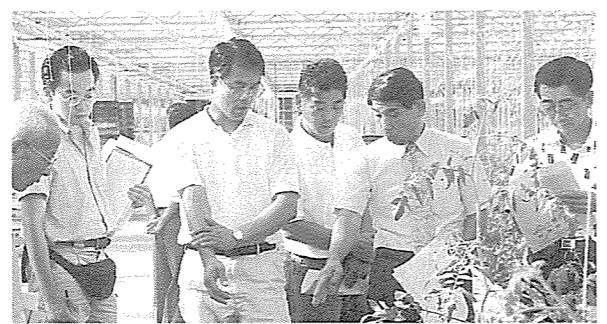
環境にやさしい 独自の循環型農法



▲常時約25人のスタッフで作業を進めている

ま農協新地支店が、「土地利用」「労働力調整」「土づくり」などで協定を結び、農協のライスセンター、育苗施設、堆肥センターなどを活用し、各農家との連携を図りながら、活力ある農村づくりを進めていきます。

「まだ二年が過ぎたばかりでいろいろな課題もありますが、何よりも地域との連携を大切にしていきたいと考えています。その上で温室の規模拡大し、ビジネスとして成立する農業経営を目指していきたい」。高橋さんと大堀さんの新しい農業を創造しようとするチャレンジ精神が、そこにみなぎっていました。



▲全国各地から訪れる視察団に説明する高橋良行さん(左から2番目)

産法人で会社組織でやろうと決めていました。高橋さんは新地町に住所を移し、新規就農者の認定を受け、以前勤めていた物産会社で交流のあつた町内の農家の仲間二人（大堀宏さん、阿部忠さん）と平成七年三月、農業生産法人（有）「新地グリーンファーム」をスタートさせたのでした。

「条件がちょうどそろつたんです。どれか一つでもかけたら多分、新地グリーンファームは誕生しなかつたでしよう。特に土地を提供してくれた農家の皆さんには感謝でいっぱいです」と専務の大堀宏さん（岡）は感慨深げに話します。

大堀さんはプロイラーが下火になつてきましたことから、平成五年春、現在地に四十アールのトマトのハウスを設置しました。しかし、春の強風で一瞬にしてハウスが崩壊し、大堀さんの夢の中にあつた大堀さんにガラスシャターの話が持ち上がったのは、平成六年の秋でした。大堀

新地グリーンファームのトマトの糖度を七度に設定し（普通のトマトは四、五度）、緑健農法と呼ばれる土耕栽培によりトマトの苗およそ七万五千本を一株ごとにコンピューターが点滴灌水で徹底した水管管理を行っています。現在役員三人で従業員七人、パート十六人。今年は施設園芸に夢を抱く大卒の新規採用者も入社しました。この採用以外にも、噂を聞きつけて、全国からグリーンファームに入りたいという希望者が殺到しているそうです。また、長期研修者が視察に訪れています。春作と秋作の年二回のトマトを出し、販路は大手のスーパーが約八割、県内の市場が二割。生産高は八年実績で約五百七十トン。販売高は二億三千万円のことです。

Q なぜ今、「法人化」か?

A 平成四年六月の「新政策」(新しい食料・農業・農村政策の方向)で、今後の農業の経営形態の選択肢の拡大方策として「農業経営の法人化」が提唱され、「農業法人」の政策的な位置づけがなされました。

法人化すればすべてがうまくいくというわけではありませんが、「後継者や女性の地位を含む就業条件や経理をきちんとしたい」と考へている農業者にとって、法人化は有効な手段となります。

農業経営の法人化を支援するため、都道府県農業会議を中心的に、法人化のための説明会や経営研修、農業法人による組織活動等を支援する事業が実施されているほか、税制、資金などの支援措置も実施されています。

受けができ、高橋さんの夢は
気に現実味を帯びたのでした。

さんは再挑戦に踏み切りました。難しいと覚悟をしていた農地の借地も、かつて果樹園地で大堀さんと共に桃栽培に励んだ先輩たちが快く応じてくれたのです。

A Q 農業法人とは？

イチョウ葉栽培に夢かける

一大生産地目指す農業生産法人(有)相馬イチョウ園

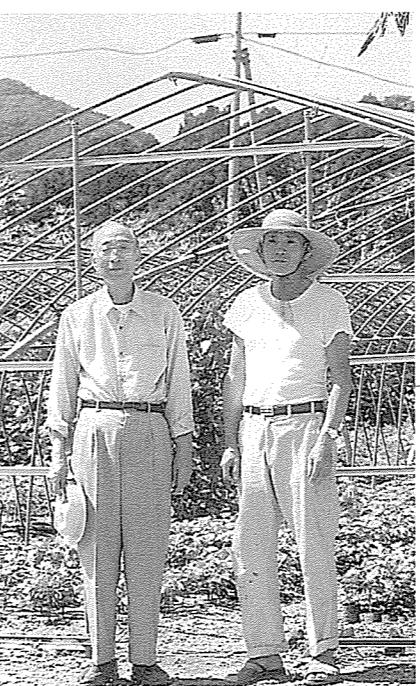
土地利用型農業として珍しいイチョウの葉の企業型生産を目指す農業生産法人が平成八年十二月に誕生しました。遊休農地を活用して農地を集積、今後十年間で植栽百ヘクタール、生産量は生葉で一千トン、乾燥葉にして三百三十三トンを生産する国内最大のイチョウ葉生産地を目指しています。

事業を進めていた(有)日本イチョウファーム代表の平間正治さんにイチョウにかける夢を聞きました。

めのものです。

健康エキスとして高い注目度

駒ヶ嶺赤柴地区の旧果樹園地跡に「農業生産法人・有限会社日本イチョウファーム」の農園二ヘクタールに約三万本のイチョウが植えられています。緑化木やギンナンの実をとるのではなく、イチョウ葉エキスを医薬品や健康食品として利用するた



▲育苗中のハウスの前で、平間正治さん(左)と林良平さん(右)

日本イチョウファームは国際

協力事業団(JICA)の農業指導者として発展途上国で指導に当たってきた平間正治さん(七十七歳・城内)が平成八年十二月に設立しました。平間さんは戦後、中南米やアフリカで日本人移住者、相手国の研究者とともに農作物の開発に努め、特に十一年間滞在したケニアでは、マカダミアンナツ生産国世界第

一

三位に育て上げました。
日本農業の危機的状況に使命感

平成二年に帰国し平間さんが目にしたものは、雑草が生い茂り荒れ地と化した田畠など、荒廃した農村風景でした。それは平間さんにとって、まるで輸入に頼ることでようやく手にしている「飽食時代」の象徴のように映りました。その時、「まだ遅くない。途上国の農村で経験したこと、郷里の農村活性化に生かそう」と決意しました。平間さんが選択したのは、遊休桑園の転換作物としてイチョウの葉の栽培でした。

イチョウ葉にはフランボイド

やカテキンなど二十種類以上の

有効成分が含まれており、成人

病予防薬として欧米では広く利



▲東北で初めて導入されたイチョウ葉専用の乾燥機と収穫されたイチョウ葉

▲鹿狼山のふもと赤柴地区に密植されたわい化イチョウ葉栽培試験場



▲平成3年にイチョウ苗の植え付け作業開始

れる結果となりました。「決まって「イチョウはいくらもうかるか」と聞かれるたびに、荒れた農地を目の前に放置しながら、なお自分の収入を優先させる姿に失望した」。このままでは、イチョウの木葉、緑化木として処分するようになるのではないかと考えるようになっていました。孤軍奮闘する平間さんによく賛同者が現れました。宮城県丸森町の元養蚕農家十五軒でした。「農家として農地をいつまでも放置しておけない。管理に見合う収入さえ得られるのなら遊休桑園に苗を植えたい」。平間さんはイチョウの苗を分け与えるとともに、組合方式でのアドバイスを行ってきました。

さらに、医療品原薬メーカー(株)常盤植物化学研究所がイチョウ葉の栽培契約を持ちかけて来たのでした。同社はイチョウ葉エキス抽出のため大量のイチョウ苗を植え付ける作業を開始しました。

「農業が駄目になったと言わ



▲健康福祉まつりでイチョウ葉エキスを展示

▲大きい葉の方がエキスを採るイチョウ葉

用されているといわれます。「健

康維持に有効な成分を植物から抽出することは、高齢化社会で重要な分野」。平間さんは約八年前から駒ヶ嶺赤柴地区の果樹園地跡約一・五ヘクタールを借り受け、三千五百本のイチョウ苗を植えました。平成六年七月に合名会社の相馬イチョウ園を設立、イチョウの葉を生産、乾燥葉として出荷してきました。

この間、新聞、ラジオ、テレビ等で報道されたこともあり、県内市町村や宮城県からの視察も多くなりました。

しかし、欧米に比べ零細で立ち遅れていることから国際的に太刀打ちができず、また折から円高などのおりでますます輸出が困難になりました。また、遊休桑園を抱える農家の関心が薄く、土地の集約がなかなか進まず、平間さんの期待は裏切ら

ヤマセ克服りんごの産地形成 「バンビりんご園地」畠栄七さん

鹿狼山のふもと標高百メートル前後の日当たりのいい東斜面のリンゴ産地「バンビりんご園地」は今、収穫作業の最盛期を迎えています。有機農業に近い栽培方法で、太平洋の日差しを浴びたりんごは、毎年好評を博しています。

昭和五十五年、県北で土地の不足からリンゴの作付けの規模拡大に悩んでいた福島市飯坂町の果樹農家五軒が開墾し、リンゴの木を植え生産がスタートしました。移住者のうち生産組合の初代組合長を努めた畠栄七さんに話を伺いました。

飯坂町から移住し地元中心の販売

畠栄七さん（六九歳・岡）は共に地を含む三ヘクタールでリンゴ栽培をしています。妻のヒサさん、長男の米七さんと家族三人で、平成六年五月に園地内に自宅を新築しました。「さんさ」

最終的には入植決定時以来、代表を努めた畠栄七さんと四人が、ほぼ同年輩の子弟があることなどから積極的に入植対策を開始しました。翌五十六年に育苗組合を結成し、途中で畠利男さんが追加加入し、現在の五軒となつたのでした。

初めは片道一時間半の通勤農業だった

車社会の中での地図上の六十キロメートルは、ほんの一走りでも、通行上の最短コースは丸森町経由の阿武隈沿い路線。両側の桑園の桑が車をなで、雨降

りには大きなえくぼが絶えない道を一時間三十分で通勤。仮宿のテントは石混じりの突風で（緑は全伐した土地で考えられない）倒れたり、雪の降らない地方だと考えていたら八十五センチの降雪で農機具舎が潰れたり（昭和六十二年二月）、翌年には沿岸を通過した六月の台風で瞬間三十メートル余りの強風で若木の芽がもぎ取られたり、畠さんが先ず遭遇したのが気象灾害でした。

品質が良くて熟期が遅く市場対象外！

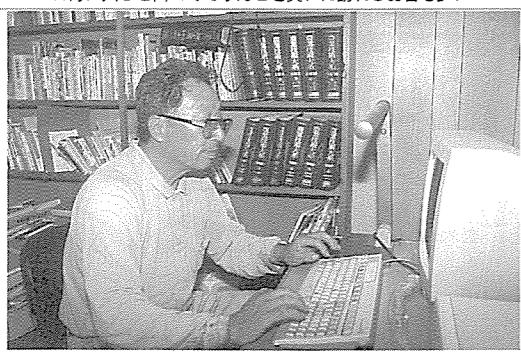
ようやく結実期を迎えて、畠さんたちはショッキングな事実



▲太平洋が一望できるバンビりんご園地



▲10月に入ると口コミでりんごを買いに訪れるお客様も多い



▲60歳からパソコンを始めた畠栄七さん

そして一方、初なりのリンゴのころから町民や近隣市町村の人々がリンゴを求めて来るようになり、味への好評を呼びました。これらの環境を考え、生きる感は見事机上の空論だと判明したのでした。

道は地元に密着した、地元産業としての自覚とPRを痛感しました。地元の名山、鹿狼の鹿とバンビから「バンビりんご園地」と命名しました。また、より広い範囲のお客さんを求めて、平成元年には、ゆうパックの参入を始めました。同時に地元供給態勢を整えるため、周年、供給木、安全性を高めるための減農薬栽培への切り札としてヘロモン設置の交信搅乱など最新技術の導入、また有効微生物活用農法として大量有機物投入による自然回帰の農法など画期的農法を導入して、地元本位の果樹園地形成を目指す生産農家も出



作る人と食べる人が交流できる場にしたい

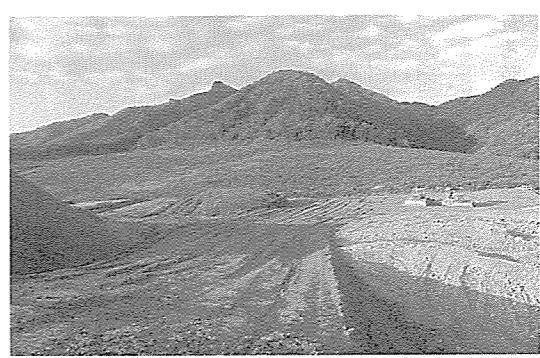
今、「グリーンツーリズム」の関連性で、愛くるしい子鹿、木、安全性を高めるための減農薬栽培への切り札としてヘロモン設置の交信搅乱など最新技術の導入、また有効微生物活用農法として大量有機物投入による自然回帰の農法など画期的農法を導入して、地元本位の果樹園地形成を目指す生産農家も出

上。生産者と消費者はいつも顔が見える関係でありたい」と笑顔で話す畠さんですが、そう言えるようになるまでは数々の試練があったのです。

規模拡大ムードの中で土地を探し求めて新地へ五軒が入植

昭和五十五年当時、果樹園芸を主体とした福島市飯坂地区では規模拡大ムードが高まっていました。しかし、山が迫り谷を控える湯野地区では、耕せる場所は限界に近いところでまで開発され、目的にかなう用地は皆無の状況でした。若い後継者を持つ親たちにとつて大変な悩みだつたと畠さんは話します。

その窮状を農協に訴えた時、偶然に県からの情報で新地町に候補地があることを知られ、現地案内を受けました。候補地が遠すぎること、慣れた果樹栽培上の可能性について疑念が大きく決心を鈍らせましたが、組織の代表者による現地踏査を実施し、現地の植生・野生動物の生息調査（夜間野宿など）近隣での果樹生産農家調査（小高町、相馬市、山元町）などから、辛うじて可能性ありの結論を得ました。

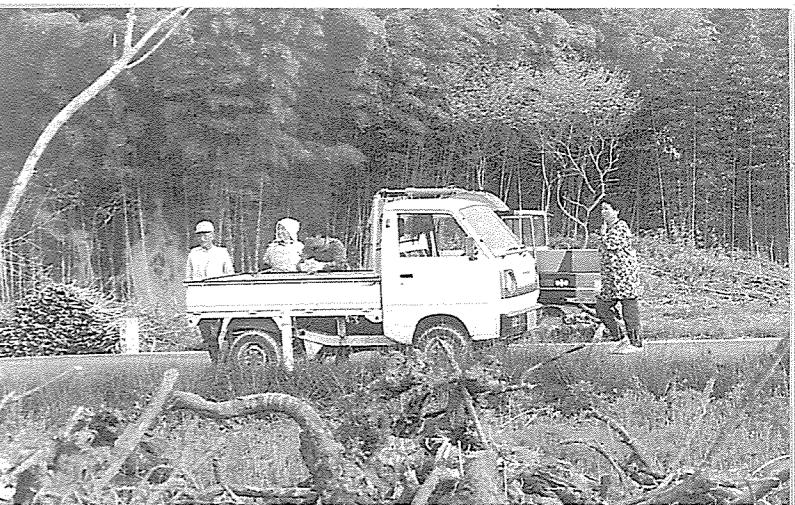


▲昭和56年、造成が始まったこの様子
（写真中央）



まちおこしグループ「根っ子の会」 遊休桑園活用しソバ栽培

もうけは度外視
環境衛生に一役



▲桑の根を掘り起こし焼却する会員たち

町内的にも遊休農地の利用対策がなかなか進まない中、福田地区の有志が『根っ子の会』(半沢俊郎会長)を結成し、地区内の遊休桑園を利用したソバの栽培が注目を集めています。一度荒廃した農地を元に戻すには膨大な労力と資金が必要となります。今、遊休農地の拡大に歯止めをかけなければ、後年に大きなけを回すことになります。遊休桑園の美化運動から始まつた町おこしグループ『根っ子の会』を取りました。

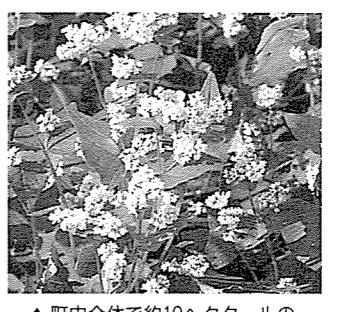
福田地区の沢口、鉄炮町、大山田地区は明治時代から町一番の養蚕地で、かつて農家の大部分が養蚕を主産業にしていました。しかし、今では養蚕を行っている農家はなく、荒れた桑園が放

置されたままになっています。平成七年当時、行政区長であった半沢敏郎さんは、桑の枝が伸びて道路の見通しが悪く、その上ネズミやハクビシンが繁殖するなど、環境衛生上の問題も

**福田地区の有志が
環境美化を目定に**

一年目の昨年は、地区内の遊休桑園約一ヘクタールを借り受け、枝を切り払った後、根を掘

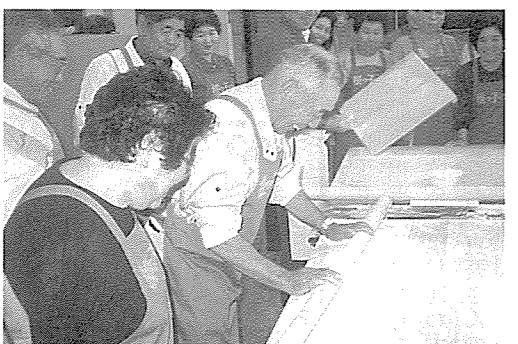
大きく、農地保全という観点からも放置はできないと、平成八年一月、沢口と鉄炮町の有志九人で「根っこの会」を結成しました。「まず家の近くから始めよう。少しずつ実績を積んで、地区内にある遊休桑園を一掃しよう」。転換作物としては管理が楽なソバに着目しました。



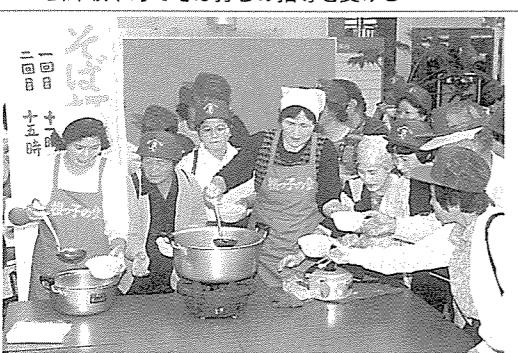
▲整地した畑に大豆やサツマイモなども植えた



▲澄んだ秋空に白一面の畑が広がる福田沢口地区



▲会津坂下町でそば打ちの指導を受ける



▲健康福祉まつりで大好評を博した試食会

健康福祉まつりで 試食会盛況

会では町の支援を受け、昨年から加工技術を習得しようと、会津でも有数のソバどころ、会津坂下町の高寺そば研究会を訪れ交流をしています。精白の仕事

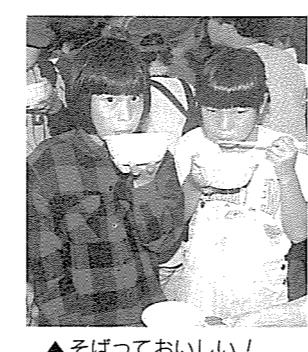
「もともと環境美化を目的にスタートした事業で、もうけは度外視している」と副会長の草野輝男さん。草野さんは今年、自ら製粉機を購入し、自宅の作業小屋に設置しました。

計十五万円を原資に、その他大豆の売上などを加え、ソバの種子や肥料代、研修費、のし板、包丁、練り鉢、のし棒などソバ打ちに必要な道具、名前入りのオリジナルエプロンなどの経費に当てました。

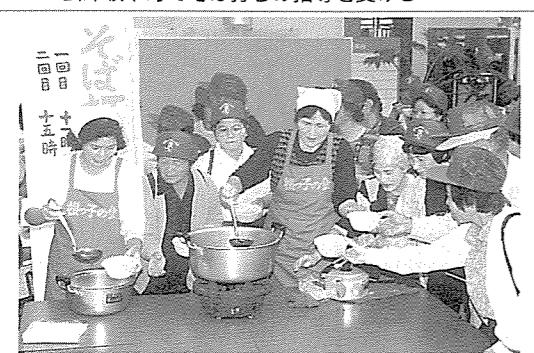
「もともと環境美化を目的に度外視している」と副会長の草野輝男さん。草野さんは今年、自ら製粉機を購入し、自宅の作業小屋に設置しました。

今年は新たに一ヘクタール分の遊休桑園を開墾、ソバは倍以上に増やし百十アール、大豆は昨年と同じ五十アール、子供たちの農業体験のためのサツマイモ、沿道にはマリーゴールドやサルビアなどの花を植えました。九月半ばに面白い花を咲かせたソバはたくさん実をつけ、収穫を待つばかり。稲刈りが終わるのを待つて刈り取り作業に取り掛かる段取りとなります。

**自分たちの生きる場所
だから大切にしたい**



▲そばっておいしい!



▲健康福祉まつりで大好評を博した試食会

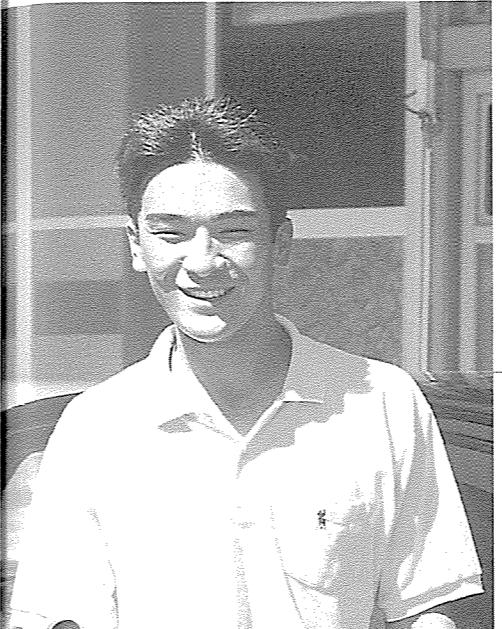
今年は福島県から町おこしグループとしての根っ子の会の活動が高く評価され、県の地域振興事業調整費事業の補助対象となりました。

沢口地区には県内でも有名な『いっぱい清水』があり、ふるさと林道も出来るので、この周辺に「道の駅」のような施設が生まれ、野菜の販売やソバの販売などできればと、根っ子の会の夢が広がっています。

「地域振興にどう結び付けるかが課題。生ソバにして食堂、旅館、民宿などで使ってもらえるようになれば一番いい。そのためには、手打ちの技術の向上を図りたい。でも、第一の目標はあくまでも環境整備。それを忘れてはいけないと思つていまつた。ここが自分たちが生きる場所なのでですから」と半沢さんは決意を新たにしていました。

特集・新たな農業への挑戦⑤

花づくりにかける水戸真吾さん(19歳)



水戸 真吾さん
(19歳・杉目)

新規就農者は農業のもつ暗いイメージを一掃し、農村に新風を吹き込んでくれます。農業で生活が成り立つのどうか。将来、家族を養つていけるのだろうか。不安はもちろんだれも持っています。

職業として農業を選んだ若い二人。意欲的に生きものを愛し、土地に溶け込んでいる二人は、農業の新しい時代を予感させます。

「小さな菊の芽を一つずつ摘んで、それを畑に植えて苗を作る。その小さな苗を大きくするため、水をやつたり消毒したりして、一生懸命自分で手入れをするんです。その花が美しく咲いたときが一番うれしいんです」と水戸真吾さん(十九歳・杉目)は目を輝かせて話してくれました。真吾さんは町内で一番若い農業青年で、昨年は新規就農者として県から就農準備貸付け金を受けました(五年間就農すれば返済免除)。

真吾さんは男三人兄弟の三男ですが、小さいころから親の手

休日のない酪農家の力になりたい 酪農ヘルパー 水戸崇宏さん(22歳)

「小さいころは家族みんなで泊まりの旅行をしたことは一度もなく、だから、サラリーマンになりました」と話す水戸崇宏さん(二十二歳・杉目)。父親の睦夫さんは平成七年に町初の県農業指導士に認定を受けた酪農家になりました。

しかし、福島県農業短大に入ったころから、酪農家が休日をついたり時その代行を行う「酪農ヘルパー」になつたと思つて育つた崇宏さんは、酪農家だけは、けしてなるまいと思つていました。

しかし、福島県農業短大に入つたころから、酪農家が休日をついたり時その代行を行う「酪農ヘルパー」になつたと思つて育つた崇宏さんは、酪農家だけは、けしてなるまいと思つていました。

卒業後、相馬地方酪農ヘルパー利用組合に入所。要請のあつた酪農家に赴き、乳牛に工サを与え、搾乳などを代行します。

郡内の酪農家は百数十軒あります。しかし、酪農家へ希望の登録をしているのは約五十軒。三人でロードショットを組み、朝は六時から約二時間、午後は五時から同じ酪農家に赴き、朝と同じ作業を行い、一日の仕事が終わります。飯館村や小高町の場合は

帰宅が八時過ぎになります。空いた日中の時間は趣味のテニスサークルに通つたり、休日には友達とボーリングなど楽しむが、違うため、夜一緒にあまり遊べないのがちょっと寂しい」。

九月三日から十六日まで崇宏さんは、県の農業経営者海外派遣事業でドイツ、オランダ、イス、デンマーク、フランスの五カ国を視察研修してきました。

一般的な農家や法人化している農家、市場などを訪れたり、現地の農業青年たちと交流したり、ホームステイなどを体験しました。ヨーロッパの農業は、自然(環境)を守るという理念で経営しているそうですが、現実は厳しく、収入の問題、後継者不足が多く、また、仲間も増え、非常に勉強になつたと話します。

町内には五軒の酪農家がいますが、後継者がほとんどいない状況です。また、農畜産物の自



▲デンマークのホームステイ先で崇宏さん(左から2番目)

●農家数の推移

	農業世帯数	専農家数	第1種兼業農家	第2種兼業農家
昭和60年	1,149	77	251	821
平成2年	1,064	70	112	882
平成7年	1,004	74	89	841

(資料:農林水産省「世界農林業センサス」)

「小さいころは家族みんなで泊まりの旅行をしたことは一度もなく、だから、サラリーマンになりました」と話す水戸崇宏さん(二十二歳・杉目)。父親の睦夫さんは平成七年に町初の県農業指導士に認定を受けた酪農家になりました。

しかし、福島県農業短大に入つたころから、酪農家が休日をついたり時その代行を行う「酪農ヘルパー」になつたと思つて育つた崇宏さんは、酪農家だけは、けしてなるまいと思つていました。

卒業後、相馬地方酪農ヘルパー利用組合に入所。要請のあつた酪農家に赴き、乳牛に工サを与え、搾乳などを代行します。

郡内の酪農家は百数十軒あります。しかし、酪農家へ希望の登録をしているのは約五十軒。三人でロードショットを組み、朝は六時から約二時間、午後は五時から同じ酪農家に赴き、朝と同じ作業を行い、一日の仕事が終わります。飯館村や小高町の場合は

帰宅が八時過ぎになります。空いた日中の時間は趣味のテニスサークルに通つたり、休日には友達とボーリングなど楽しむが、違うため、夜一緒にあまり遊べないのがちょっと寂しい」。

九月三日から十六日まで崇宏さんは、県の農業経営者海外派遣事業でドイツ、オランダ、イス、デンマーク、フランスの五カ国を視察研修してきました。

一般的な農家や法人化している農家、市場などを訪れたり、現地の農業青年たちと交流したり、ホームステイなどを体験しました。ヨーロッパの農業は、自然(環境)を守るという理念で経営しているそうですが、現実は厳しく、収入の問題、後継者不足が多く、また、仲間も増え、非常に勉強になつたと話します。

町内には五軒の酪農家がいますが、後継者がほとんどいない状況です。また、農畜産物の自

「小さいころは家族みんなで泊まりの旅行をしたことは一度もなく、だから、サラリーマンになりました」と話す水戸崇宏さん(二十二歳・杉目)。父親の睦夫さんは平成七年に町初の県農業指導士に認定を受けた酪農家になりました。

しかし、福島県農業短大に入つたころから、酪農家が休日をついたり時その代行を行う「酪農ヘルパー」になつたと思つて育つた崇宏さんは、酪農家だけは、けしてなるまいと思つていました。

卒業後、相馬地方酪農ヘルパー利用組合に入所。要請のあつた酪農家に赴き、乳牛に工サを与え、搾乳などを代行します。

郡内の酪農家は百数十軒あります。しかし、酪農家へ希望の登録をしているのは約五十軒。三人でロードショットを組み、朝は六時から約二時間、午後は五時から同じ酪農家に赴き、朝と同じ作業を行い、一日の仕事が終わります。飯館村や小高町の場合は

帰宅が八時過ぎになります。空いた日中の時間は趣味のテニスサークルに通つたり、休日には友達とボーリングなど楽しむが、違うため、夜と一緒にあまり遊べないのがちょっと寂しい」。

九月三日から十六日まで崇宏さんは、県の農業経営者海外派遣事業でドイツ、オランダ、イス、デンマーク、フランスの五カ国を視察研修してきました。

一般的な農家や法人化している農家、市場などを訪れたり、現地の農業青年たちと交流したり、ホームステイなどを体験しました。ヨーロッパの農業は、自然(環境)を守るという理念で経営しているそうですが、現実は厳しく、収入の問題、後継者不足が多く、また、仲間も増え、非常に勉強になつたと話します。

町内には五軒の酪農家がいますが、後継者がほとんどいない状況です。また、農畜産物の自

「小さいころは家族みんなで泊まりの旅行をしたことは一度もなく、だから、サラリーマンになりました」と話す水戸崇宏さん(二十二歳・杉目)。父親の睦夫さんは平成七年に町初の県農業指導士に認定を受けた酪農家になりました。

しかし、福島県農業短大に入つたころから、酪農家が休日をついたり時その代行を行う「酪農ヘルパー」になつたと思つて育つた崇宏さんは、酪農家だけは、けしてなるまいと思つていました。

卒業後、相馬地方酪農ヘルパー利用組合に入所。要請のあつた酪農家に赴き、乳牛に工サを与え、搾乳などを代行します。

郡内の酪農家は百数十軒あります。しかし、酪農家へ希望の登録をしているのは約五十軒。三人でロードショットを組み、朝は六時から約二時間、午後は五時から同じ酪農家に赴き、朝と同じ作業を行い、一日の仕事が終わります。飯館村や小高町の場合は

帰宅が八時過ぎになります。空いた日中の時間は趣味のテニスサークルに通つたり、休日には友達とボーリングなど楽しむが、違うため、夜と一緒にあまり遊べないのがちょっと寂しい」。

九月三日から十六日まで崇宏さんは、県の農業経営者海外派遣事業でドイツ、オランダ、イス、デンマーク、フランスの五カ国を視察研修してきました。

一般的な農家や法人化している農家、市場などを訪れたり、現地の農業青年たちと交流したり、ホームステイなどを体験しました。ヨーロッパの農業は、自然(環境)を守るという理念で経営しているそうですが、現実は厳しく、収入の問題、後継者不足が多く、また、仲間も増え、非常に勉強になつたと話します。

町内には五軒の酪農家がいますが、後継者がほとんどいない状況です。また、農畜産物の自

「小さいころは家族みんなで泊まりの旅行をしたことは一度もなく、だから、サラリーマンになりました」と話す水戸崇宏さん(二十二歳・杉目)。父親の睦夫さんは平成七年に町初の県農業指導士に認定を受けた酪農家になりました。

しかし、福島県農業短大に入つたころから、酪農家が休日をついたり時その代行を行う「酪農ヘルパー」になつたと思つて育つた崇宏さんは、酪農家だけは、けしてなるまいと思つていました。

卒業後、相馬地方酪農ヘルパー利用組合に入所。要請のあつた酪農家に赴き、乳牛に工サを与え、搾乳などを代行します。

郡内の酪農家は百数十軒あります。しかし、酪農家へ希望の登録をしているのは約五十軒。三人でロードショットを組み、朝は六時から約二時間、午後は五時から同じ酪農家に赴き、朝と同じ作業を行い、一日の仕事が終わります。飯館村や小高町の場合は

帰宅が八時過ぎになります。空いた日中の時間は趣味のテニスサークルに通つたり、休日には友達とボーリングなど楽しむが、違うため、夜と一緒にあまり遊べないのがちょっと寂しい」。

九月三日から十六日まで崇宏さんは、県の農業経営者海外派遣事業でドイツ、オランダ、イス、デンマーク、フランスの五カ国を視察研修してきました。

一般的な農家や法人化している農家、市場などを訪れたり、現地の農業青年たちと交流したり、ホームステイなどを体験しました。ヨーロッパの農業は、自然(環境)を守るという理念で経営しているそうですが、現実は厳しく、収入の問題、後継者不足が多く、また、仲間も増え、非常に勉強になつたと話します。

町内には五軒の酪農家がいますが、後継者がほとんどいない状況です。また、農畜産物の自

「小さいころは家族みんなで泊まりの旅行をしたことは一度もなく、だから、サラリーマンになりました」と話す水戸崇宏さん(二十二歳・杉目)。父親の睦夫さんは平成七年に町初の県農業指導士に認定を受けた酪農家になりました。

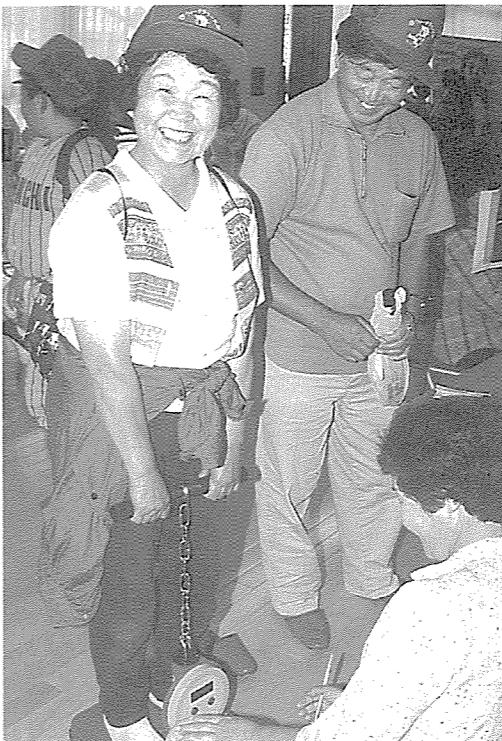
しかし、福島県農業短大に入つたころから、酪農家が休日をついたり時その代行を行う「酪農ヘルパー」になつたと思つて育つた崇宏さんは、酪農家だけは、けしてなるまいと思つていました。

健康福祉まつりで体力測定

あなたの体は何歳でしたか？

そろそろヤバイ？ まだまだ捨てたもんじゃない？

「すつきり、すこやかヘルシーライフ」をテーマに健康福祉まつりが九月十四日、保健センターと農村環境改善センターを開催され、健康や福祉について理解を深めました。当日の模様をカメラルポしました。



▲体力測定で健康チェック



▲それ、もう少しガンバレ！



▲大きく息をはいて肺活量の計測



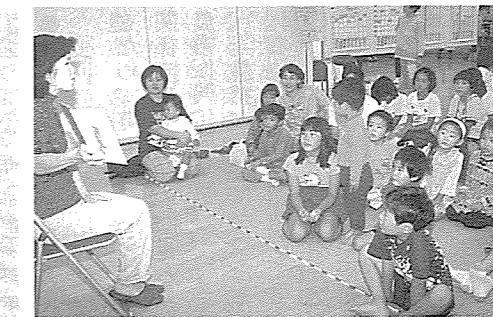
▲老人クラブの力作も展示



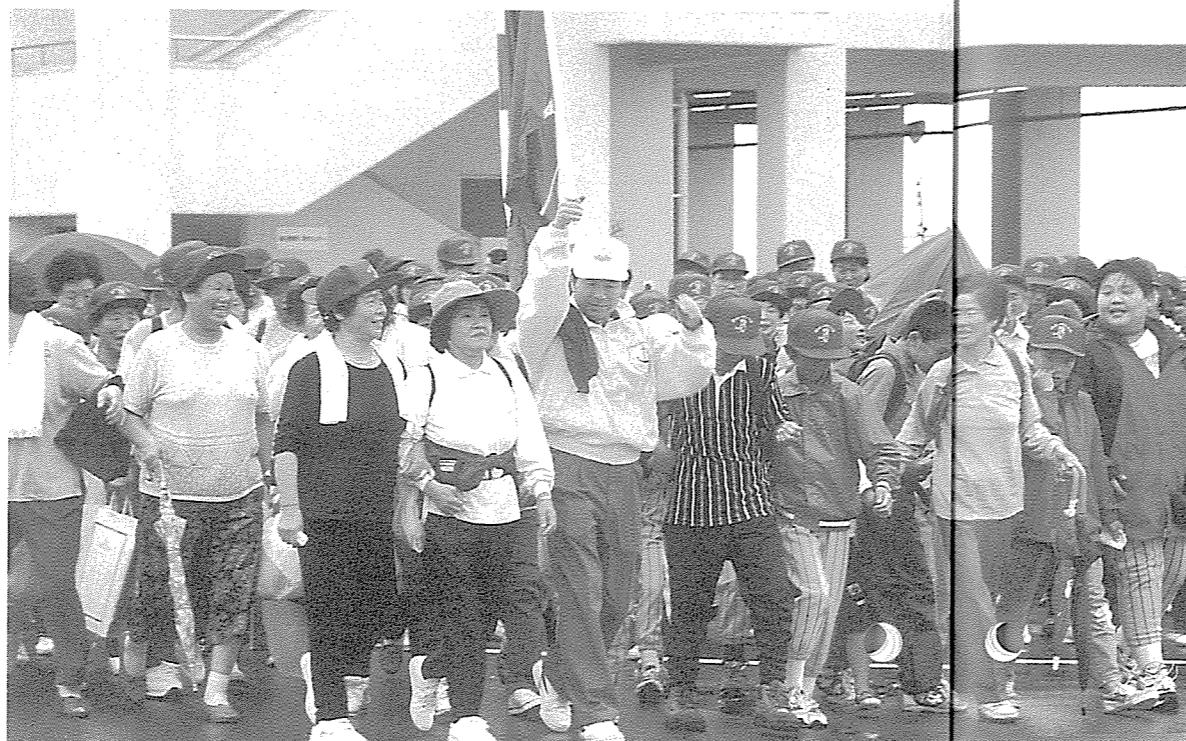
▲笑顔で伝承あそび



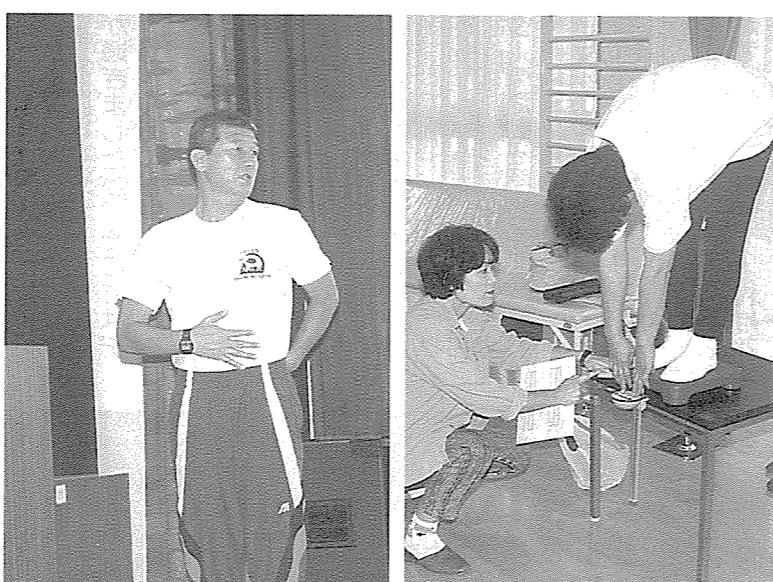
▲堺浜神楽も会場を盛り上げた



▲おのしみ広場にはたくさんのチビッコが集った



▲小雨の中、6キロの道のりを歩く健康ウォークに300人が参加



▲佐間田先生の健康講演会

▲まだまだ若いです



▲バスの中で介護用品の説明を受ける町民

10月19日(日)は「総合防災訓練の日」

対象

第一、二行政区(沢口、鉄炮町、大山田、中里、明地地区)

平成七年一月十七日に発生した阪神淡路大地震

は、市民生活に甚大な被害をもたらし防災に対する多くの教訓を残しました。町では、各種災害を想定し、第一、二行政区を対象に第三回目の総合防災訓練を行います。

地域の皆さんと消防など防災関係者が一体とな

つて実施します。

▽日 時 10月19日(日)午前8時～10時(小雨決行)

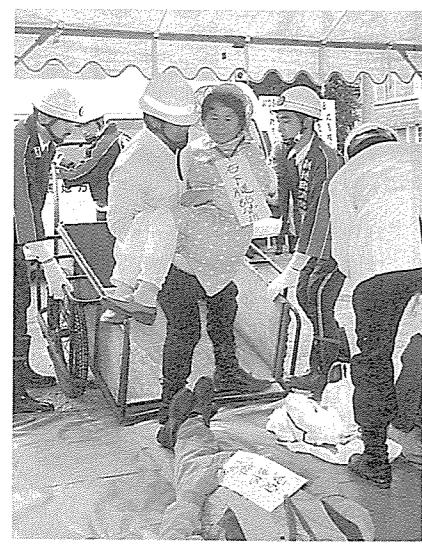
▽対策本部 勤労青年ホーム駐車場

▽内 容 避難誘導訓練、初期消火、救助訓練、

応急救護等

※訓練時間中は、第一、二行政区内外では交通規制が行われます。ご協力をお願いします。

◎主催役場総務課・相馬消防新地分署



楽しくて生きがいを感じる

鈴木梅子さん

「自分で動けるうちは大丈夫」。そう思っていたのですが、半年前から膝が痛みだし、2カ月前から家族に勧められデイ・サービスの利用を始めました。通い始めてからリハビリを続け、膝の調子も良くなり自分で動けるようになりました。

また、多くの仲間も出来、ワイワイ仲良くなっています。いちご狩りやスイカ割りなど楽しい催し物も多く、毎回生きがいを見いだしています。思い切ってもっと早くデイ・サービスを利用すれば良かったなと、今では思っています。

インタビュー 仲間との会話が母の力に

今年3月に母が風邪から突然倒れ入院し、それ以後体が不自由になってしましました。私がボランティアでホームへよく訪れていたので、すぐにデイ・サービスを母に勧めました。7月から利用を始め、少しづつ体の自由が戻ってきました。リハビリもさることながら、今まで一人で心細かった母ですが、多くの仲間に出会い、頑張っている姿を見て、自分も自立しようという前向きな気持ちになったのだと思います。なによりも仲間との会話が、母を力づけているのだと思いました。

職員の方々には、母の事を何もかも理解してもらっているのでデイ・サービスセンターは安心出来るんですね。特に入浴サービスはありがたいと母は喜んでいます。私も母もとても感謝しています。

太郎「お花さんは昔から器用だったから紙飛行機の作り方うまいな」
花子「太郎さんにほめられだどごろで、一丁とばしてみつか」
寮母「それ、がんばれー」
花子「それ」
と、その時、花子さんの体は車椅子から立ち上がっているではありませんか。
帰宅した花子さんの家に隣の若子さんが訪れました。
若子「花子さん、どうだつたい。
デイサービスは」

呂。ほんにさっぱりした」
若子「へゝ、お風呂にも入れて
もらえるんだ。うちのおばあ
ちゃんも体を拭くだけなんで、
いつもお風呂さへえりてえつ
て言つてるんだけど」
花子「一般用のお風呂もあるし、
寝たままや座つたままで入
れるお風呂もあるから、緑子
さんも安心して入浴でぎる。
それに松島へのドライブやイ
チゴ狩り、お花見とかにも出て
るのよ」
若子「えー。楽しそうだね。利

利用ができるんだ
若子「花子さん詳しいわね」

子さんの姿がありました。
＊ * *
デイサービスでは、利用される方々に生きがいをもって生活していただくためのお手伝いをしています。

また、介護する方には一週間に一回程度の数時間ですが、介護から離れた時間を持つてもらうための施設です。



▲デイサービス運動会 に向けて練習に励むデイサービス利用者

が、作詞・作曲を
楽しみながら活動

皆さんは「新地ホーム」を利用することはありますか？特別養護老人ホームが過ぎましたが、そこではデイ・サービスも併せて行っています。

デイサービスを利用するたいとで、体が不自由で家にこもりがちなお年寄りも気分転換が図られ、家族も介護からひととき解放され自由な時間が持てます。

今回はデイ・サービスセンターの活動を紹介します。

友人や仲間として 楽しみながら活動

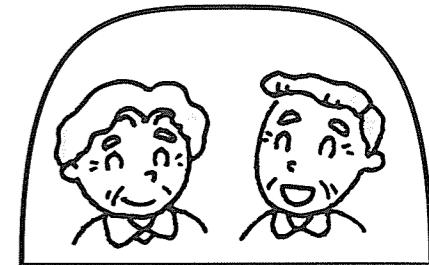
○月×日、特養ホームのバスがデイサービスセンター利用者を乗せてセンターに到着。

「おかれました」自「絶行
花子「駒ヶ嶺町の新地花子と申
します。最近、歩るがんにぐ
なつて寝てばかりいたので……」
今日はよろしくお願ひします」

太郎「ここがでぎでがらだ。おれも車椅子になつてな……。毎週楽しみできていたけど、お花さんがきてくれでおれも嬉し



▲洗髪の後、ドライヤーですっきり整髪に「ニッコリ」



■ 特集・在宅福祉を支える I

一人で悩まないで
デイ・サービスを利用ください
あなたを待っている人がいます

特集・在宅福祉を支える II

特集・在宅福祉を支える III

社を支援する役割を果たしたい



西方市郎 新地ホーム
施設長

豊かな老後をすこすための究極の目的は、福祉サービスを必要とする人々が、必要としない人々と一緒に同じ社会生活を送ることができるようにすることです。

星の時代記

寝たきりや病弱などのお年寄りの在宅生活を支援する「在宅サービス」の種類と概要を紹介します。(ディ・サービスは前頁を参照)

新地町でも六十五歳以上の高齢者といわれる方々が町の人口の二十二パーセントになります。まさに超高齢社会です。長寿を祝い祝福する反面、寝たきりや痴呆などの状態にある老人が増えるのも当然です。歳を取るに伴つて病気にわざらつている人や、病気にわざらいやしくなる率が高くなるとともに「要介護老人」と呼ばれる方が急激に増えています。

また、人口構造の変化と同じように家族構造の変化も激しいものがあります。一人暮らしや高齢者のみの世帯が増え、もはや高齢者に対する家族の介護力が期待できなくなつてきていてます。それにつれて扶養意識もまた変化し、高齢者側も子供やお嫁さんに世話をしてもらうことを期待しなくなっています。こうしたことが、日ごろからの健康管理に关心が高まり、健診や健康情報に対するニーズが増大していきます。これは老後

の不安の裏返しといえます。痴呆や寝たきりなどの状態になり、人の手を借りなければ生活できなくなつたらどうするか、という老後の不安を感じている人がほとんどです…。

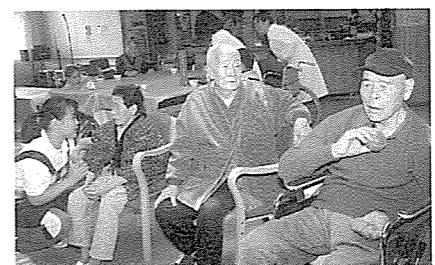
従来は、高齢者は全て低所得者であり肉体的、精神的弱者であるという前提のもとに、さまざまな施策が行われてきました。ところがこれから高齢者は、価値観も多様化し、肉体的にも精神的にも個人差が拡大するとともに、年金などの生活保障の充実により経済基盤においても必ずしも弱者といえないと見ています。

高齢者自身もサービスの一方的受手ではなく、場合によつては、サービスの提供そのものに参画する、という考えにならなければならぬと思います。

これまで家族で解決していく問題が、今や社会全体の機構の中で支えなければたちゆかなくなつてきています。

在宅介護支援センター建設

町では、こうした状況を踏まえて、新規事業として平成十年開所を目指し、新地ホームに在宅介護支援センターの建設を進めています。在宅の方へ、専門に二人の職員が老人介護の相談や介護用品の斡旋等に応じるものです。私は特養ホーム、デイ・サービスセンター、在宅介護支援センターの三つの機能が一体になり、施設福祉から在宅福祉を支援する拠点の役割を果



▲「おばあさんきょうはね…」
ホームで会話がはずむ



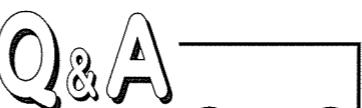
寄稿

たせることを望んでいます。
だれしも住み慣れた家や家族
を思う気持ちは時が経ても変わ
るものではありません。

豊かな老後をすごすための窓
極の目的は、福祉サービスを
必要とする人々が、福祉サービ
スを必要としない人々と一緒に
同じ社会生活を送ることがで
きるようになります。



▲「手をふきましょうね」
老いた手にぬくもりが伝わっていく



質

将来、特別養護新地ホームに入所したいのですが、どのような手続きが必要なのか教えてください。

特養ホームへの入所を希望する場合は、町健康福祉課に相談ください。入所申請が提出されると、入所判定委員会で、入所可否の判定が行われます。その結果、希望する施設に順番に入所委託をし、入所待機となります。

在宅福祉サービスや施設入所については、町健康福祉課(☎内線26)にご相談ください。

おばあちゃんへ

鈴木史江さん

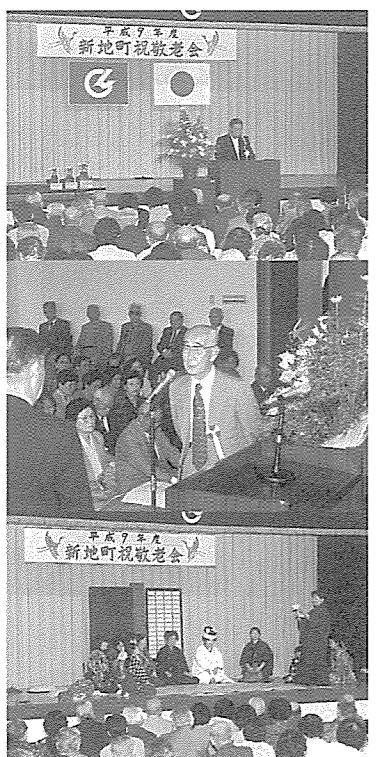
(城内出身 短大卒 年生 鈴木千代子さんのお孫さん)

祖母の性格から、自分自身大変もどかしかったのではないかと思います。
祖母が元気でいたころは、私が反抗期だったこともあり、ぶつかり合い毎日でした。祖母が発言する一つも文句を言い、それに対して祖母も文句をつくような状態でした。今、改めて思い返してみると、たしかに当時、祖母は私にとって腹の立つ喧嘩相手でした。しかし、祖母がいてくれたからこそ今の自分がいるんだと、正直祖母が瘦たきりにな

つて感じることができました。在宅介護をしていたころ、座つているのもままならなかつた祖母でしたが、新地ホームでお世話になり始めたころ、車いすに乗つた祖母を見て大変うれしかつたです。この場を借りてお礼申し上げます。

最後に、祖母へ、いや、いつものように、ばあちゃんへ、改めて言つたことはないけれど反抗ばかりしてごめんね。いつまでも元気で、ばあちゃんの笑顔、いちばん大好きだよ。

『郡山ひまわり号を走らせる会』に障害を持つ人と持たない人が共に生きる社会の原点を見た



いつまでも、**最生毛**をしり
シワの数だけ幸せになつて。

新地町敬老会

- 9月15日(敬老の日)
- 農村環境改善センター

藤崎劇團の
創作劇に
笑いと涙の渦

ヒデ子さん夫妻ら金婚夫婦に荒町長から記念品が贈られました。荒町長が「町の発展は皆さん
の努力のたまものです。さらには生きがいのある町づくりを進め
ていきます」とあいさつ。出席者全員で万歳三唱を唱和し、長寿を祝いました。

式終了後は、昨年に引き続き藤崎劇団による『光はいすこに』
が上演され、お年寄りたちは爆笑あり、ちょっぴり涙ありの創
作劇を楽しみ、敬老会を過ごしました。



百歳になつたら、
鹿狼山にお参りに

もう一度来たいと思います」と思いました。ある障害者の方が話してくれました。

「見たい」といふ声が多かったため、新地町を対象に昨年から調査を進めていました。「下見に五回ほど新地町を訪れています。駅から海が近いのときれいな駅というところで決めました。そしてなによりも町長さんをはじめ町関係者の温かい支援があればこそなんです」と桑野協立病院に勤める事務局スタッフの小野哲夫さんは話します。

哲夫さんは話します。

当日は雨のため会場を農村環境改善センターに移し、新地町ボランティア会(本内時江会長)が豚汁のサービス、県無形文化財に指定されている福田十二神樂が舞いを披露しました。「雨で

町内の男性で最高齢者の加藤嘉七さん九十八歳（小川）。朝三時に起き、気分のよい日には庭を散歩したりと、元気に暮らしています。八十歳から医者にかかることがないといいます。酒、タバコはたしなまず、町の優良健康制度ができた平成元年から毎年、表彰を受けています。



▲新地駅に到着したひまわり号参加者ら



▶ 荒町長が力丸会長に記念品を贈る

障害をもつ仲間とボランティアの熱い思いを乗せて雨の中新地へ到着

野駅から障害を持つ仲

ひまわり号のルーツは
昭和五十八年十一月、上

や公務員、主婦、医師や
看護婦、高校生や大学生、
家政婦など。

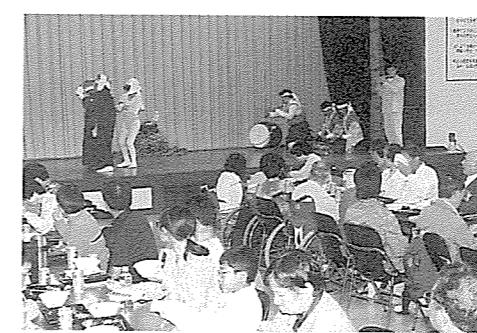
んでいました。ボランティアの皆さんには、会社員

椅子ごと障害者を運び
ようやく改札口へ。ボラ
ンティアの顔に干渉浮か

椅子の方が跨線橋を渡るため、ボランティアが車

JR新地駅に到着。障害者やボランティア百五人が降り立ちました。唐

ひまわり号を走らせ、「丸佳世会長」（事務局郡山市、のひまわり号 in 新地町の臨時列車が九時四十二



▲福田十三神楽も出演

とボランティアの熱い思いを垂せて、日光をめざしました。隨害を持つ人の「汽車に乗つて旅をしたい」という切実なる望みに応じたこのニュースは、日本列島を駆け巡り、全国各地でまりました。

ボランティア、まだ小さい芽
でも世の中を変える力に
障害者の方はほとんど在宅で
暮らす人達で、昨年同事務局が
行つたアンケート調査では「海

れまでも毎年バスや列車による「ひまわり号」を走らせ、県内や東京ディズニーランド、宮城県松島町などに訪れていました。新地駅で荒町長らが出迎え、「ようこそいらっしゃいました」と新地町は海と山など自然に恵まれた町です。今日はあいにくの天候ですが新地町を満喫していいください」と歓迎のあいさつ。一行は小雨交じりの天候のため楽しみにしていた地引き網は中止になりましたが、海を見るのは初めてという障害者も多くの波が打ち寄せる釣師浜海水浴場に歓声を上げていました。

読みたい本を読めばいい

秋風が舞い、とても過ごしやすい季節になりました。食欲の秋ではありますが、秋の夜長に虫の声を聞きながらの読書の秋も結構いいものです。

'97読書週間は十月二十七日~十一月九日まで、読書推進協議会主催で開催されます。標語は「読みたい本を読めばいい、読みたいように読めばいい」です。今年の直木賞受賞作品「鉄道員(ぼっぽや)」/浅田次郎で心温まつたり、「女たちのジハード/篠田節子」で、OLS五人組に反感や共感を持ったり、人気作家、山田詠美の「4U」で幸

シンティア先生の
ハローエブリワン



夏休みの間、わたしは4カ国を訪れました。最初にインドネシアを訪れました。そこではたくさんの猿を見ました(猿にかまれました)。また、コウモリや他におもしろい動物も見ました。また、古い寺院がある多くの美しい場所や活火山を訪れました。ダイビングをしたり多くの美しい魚を見ました。

2番目の国はシンガポールを訪れました。そこは小さな国で、赤道の100キロメートル北にあります。もちろんとても暑いです!そこでわたしはライオンの頭と魚の身体をした動物の像マーライオンを見ました。そこから、歴史的に重要な赤い建物のあるマレーシアの最も歴史ある町マラッカを訪れました。

最後にオーストラリアを訪れました。そこではたくさんのワニを見ました。スカイダイビングをしたり、とても有名なエアーズロックに登りました。この旅はとてもすばらしかったです。なぜなら多くの異なる国から来たたくさんの人と出会い、新しい文化やもの

福感を味わってみたりと、その他、沢山の新書で読みやすい本をそろえてありますのでぜひご利用下さい。分からないことや、本が見つからないときは、気軽に相談して下さい。

また、学校での読書感想文の課題図書「ちきゅうのなかみ」「ちいさなちいさな王様」「砂糖の世界」など、全十四冊を展示してあります。学生以外の方も楽しめる本です。

児童書でも雑誌でも、読みたいた時に読みたいように、読むことからすばらしい発見があるのです。

文・目黒美千代 図書館司書

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4		
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

●は定休日



▲ A.V.コーナーで楽しむチビッコたち

体脂肪つてなに?

畠山 美雪 主任保健婦



こんにちは保健婦です

食欲の秋に入り、なんとなくお腹の周りが気になり、体重計に乗ってピックリ…なんていう方はおりませんか。今月は、体の中の脂肪について勉強してみましょう。体重に対する体脂肪(体の中に蓄えられている脂肪)の割合

○肥満とは、体重が重い人=肥満とは限りません。

○肥満とは、体重が重い人=肥

満とは限りません。

○肥

『縄文 shin-chi 探求会』が行く!

繩文しんち探求会(寺島幹雄会長、十七人)が九月六、七日、会津地方の活性化の現状と課題を研修してきました。探求会は昨年生涯学習の町づくりの一環として行つた「しんち観海大学」の修了生らが今年一月に結成。しんち観海大学は町内に繩文後期の新地貝塚や三貫地貝塚などがあることから、繩文時代を見直そうと、土器製作や堅穴式住居の建設、松島の繩文の里の研修、新地高校主催の「はまなす祭」の参加など計十一回の講座を行つてきました。

「講座が終わつて修了生のつながりがなくなるのは惜しい。お茶を飲みながらひんぱんに交流しようと盛り上がつたのです」と寺島会長。今後とも心のふれあいを大切に楽しい活動をしていきたいと述べています。



▲尾瀬沼を視察する探求会員たち

スリッパありがとう

新地ライオンズクラブ（日黒秀明会長、会員二十一人）が九月十七日、町にスリッパ五百十五足（十万円相当）を寄贈しました。

新地ライオンズクラブは、会社員、自営業、建設業、公務員、農業、商業など異業種のメンバーで組織する奉仕団体です。同クラブは県内八十一番目のクラブとして八月二十四日に誕生したばかりで、十一月二十四日には認証状の伝達式が行われます。「まだ出来たばかりなので、毎月二回定例会を開催しながら、自分たちに出来る奉仕活動について摸索しているところで、す」と日黒会長。

町では寄贈されたスリッパを農村環境改善センターで利用していく予定です。



「砂子田川は泣いていた」

県生活環境部から依頼を受けて実施しているもので今年で六年目。以前の調査ではサワガニや、カワゲラ類など清流に生息する生き物も捕獲されましたが、今回採集された中にミズムシやヒルなど汚い川に住む生物が多く見られ、川の汚れが進んでいることが分かりました。

探検隊は、「こんな汚い川なのにフナやザリガニ、ドジヨウや虫がいて驚きました。きれいな川ならもっと多くの魚がいるんだろうに…」と嘆く声も聞かれ、生活排水の影響などを真剣に話し合っていました。



九月七日、尚英中学校大運動会が公民館グラウンドで行われ、生徒三百八十九人とその家族が参加し、さわやかな汗を流しました。今年は尚英中学校の新築工事のため、会場を新地町柔剣道場前の公民館グラウンドに移して実施。

当日は心配していた雨も朝には上がり、佐々木健二校長、加藤隆宣生徒会長のあいさつの後、選手は家族らの声援を受け、力いっぱい競技に挑みました。三十一人三三一脚、リレー、綱引き、また、クラス対抗玉入れなどの競技には家族も一緒に参加し、親子で楽しい一日を過ごしていました。

スポーツの秋だね！

九月七日、尚英中学校大運動会が公民館グラウンドで行われ、生徒三百八十九人とその家族が参加し、さわやかな汗を流しました。今年は尚英中学校の新築工事のため、会場を新地町柔剣道場前の公民館グラウンドに移して実施。

当日は心配していた雨も朝には上がり、佐々木健二校長、加藤隆宣生徒会長のあいさつの後、選手は家族らの声援を受け、力いっぱい競技に挑みました。三十一人三三一脚、リレー、綱引き、また、クラス対抗玉入れなどの競技には家族も一緒に参加し、親子で楽しい一日を過ごしていました。

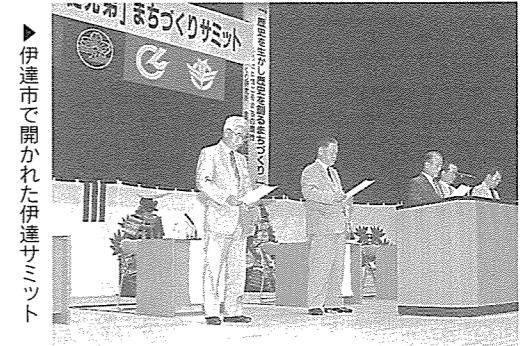


▲夜間、練習に励む強化選手たち

歌舞伎の歴史

機会のない地域を巡回公演し、子供や地域の人々に芸術を鑑賞してもらおうと九月二十四日、「劇団影ぼうし・中国唐山市皮影劇団」が新地小体育館で影絵人形劇上演しました。主催は県・町など。

当日は町内の児童や一般町民ら約五百六十人が訪れ、日中合作合同で影絵人形劇による「牽牛と織姫」と「杜子春伝」を楽しみました。中国では影絵人形劇を皮影戯といい、世界最古の歴史を持ち、ロバの皮に彫刻をほどこした美しい人形によつて演じられます。カラーで美しい影絵人形劇は迫力もあり、まるで魔法のような芸術を感じさせます。一時間半にわたる上演でしたが、子供たちは最後まで熱心に見入っていました。



卷之三

伊達サニバトで交渉

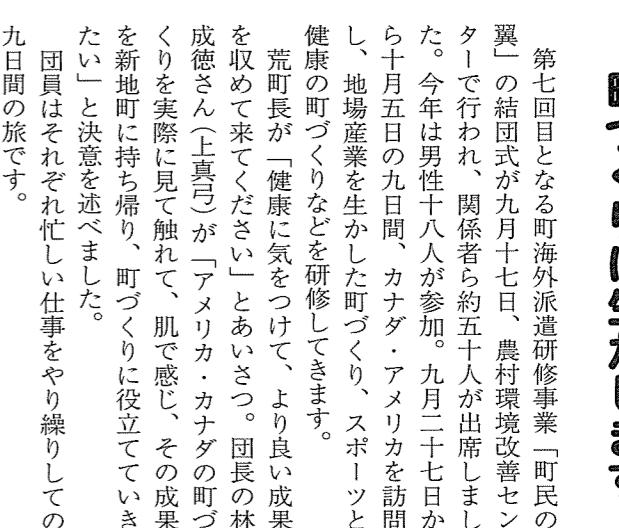
あなたの周りの身
近な話題をお寄せ
ください。



元弘者心々口傳驛住ニシテ

路を駆け抜ける「第九回ふくしま駅伝」が十一月二十三日、白河総合運動公園をスタートし、福島県庁まで十五区間一〇二、九キロのコースで行われます。

九月十一日、農村環境改善センターで町関係者、選手、役員ら約五十人が出席し、「二十七人の強化選手を決め、健闘を誓う結団式」が行われました。荒町長が「監督を中心練習を重ね、立派な成績を収めてください」と、激励の言葉を送り、監督の加藤憲郎さんに委嘱状を手渡しました。昨年の成績は県内八十八チーム中七十二位。今年のチームは一般七人、高校生八人、中学生十二人の二十七人の選手で結成され、昨年以上の成績を收めようと練習に励んでいます。皆さんの温かい応援をお願いします。



健康の町づくりなどを研修してきます。

荒町長が「健康に気をつけて、より良い成果を収めて来てください」とあいさつ。団長の林成徳さん（上真弓）が「アメリカ・カナダの町づくりを実際に見て触れて、肌で感じ、その成果を新地町に持ち帰り、町づくりに役立てていきたい」と決意を述べました。

団員はそれぞれ忙しい仕事をやり繕りしての九日間の旅です。

消息

(8月21日~9月20日届出)



お誕生

おめでとう

(子供) (親) (地区)
和哉 菊地友伸・美樹 小川

夏実 鎮田泰道・永子 上真弓

葉里足立明伸・裕子 新地町

涼平遣水進一・めぐみ 大戸浜

夢奈目黒大輔・恵美子 小川



ご冥福をお祈りします

(死亡者) (年齢) (地区)

佐藤ツヤ 80才 上ノ町

佐藤みち 93才 富倉

三品まるよ 85才 新地町

目黒益子 38才 木崎

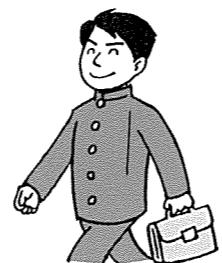
※この欄に掲載を希望しない方は、届出のときに申し出てください。

▼募集人員

1,000人

▼出願期限

10月31日(金)



あしなが育英会

(父または母)が、病気や災害(道路における交通事故を除く)などで死亡したり、それらが原因で著しい後遺傷害で働けないため教育費に困っている家庭の中学生三年に在学している生徒に奨学金を貸与し、高等学校・高等専門学校への進学の援助を行っています。

わくわくランプ

イベント案内

◎問い合わせ 在学中学校又は

あしなが育英会

◆

新地発電所

◆

わくわくクイズツア

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

散歩道



自然と友達になろう

自然の中に身を置いてのびのびとした気持ちで時間を過ごしてみたい。そんなゆとりと安らぎに満ちた自然とのふれあいが、ここ「相馬地域開発記念緑地」にあります。駒ヶ嶺地区の中心部に位置する記念緑地は、相馬地域開発による躍進の第一歩を記念して造られました。

やわらかな風吹く中、桜の回廊があでやかに花咲く春。木立ちの緑いそう深く、蝉しぐれ響わたる夏。そして大地の恵みに豊かに色づく秋も、凜とした空気が流れる冬も季節ごとにちがつた顔を見せてくれます。太平洋が一望できる展望台、スイセン、アヤメ、ハナショウブなど水生植物を観察できる水生植物園。子供達の空間としてコンビネーション遊具のある子供の広場。バーベキューなど調理するための調理棟、テープルを備え付けてあるバーベキュー広場など、秋の休日ともなると大勢の町民らでにぎわいをみせます。

少子化社会といわれる今日、自然の中でのびのびと遊ぶ子供たちの姿が年々少なくなってきたように感じられます。自然豊かな公園で、家族でのんびりとくつろぎ、共に時間を過ごす。そんな休日を持ちたいものでです。

記念緑地は今、木々たちもほんのりと色づき、本格的な紅葉の時期を迎えようとしています。

人の動き

- 人口／9,090人（-2人）
男／4,452人（-3人）
女／4,638人（+1人）
- 世帯数／2,371世帯（-1世帯）
9月1日現在（）は前月比

今月の納税

- 固定資産税
 - 国民健康保険税
 - 国民年金
- 第3期分
第4期分
10月分

▼久しぶりに農業関係者を取材し、農業にかけるひたむきな姿勢、意欲がうかがえ、気持ちのよい取材でした。かつて私が産業課に席をおき農政を担当していたころ、農業法人化は夢のまた夢に思えていました。給与制、休日制、社会保険加入など、つまりサラリーマンのような待遇の農業経営をするには、それに見合うだけの所得が必要だからです。今、ビジネス感覚で新たな農業に挑戦する高橋良行さんたち、失礼ながら七十七歳という高齢にもかかわらず、なお農業に夢を抱く平岡正治さん、そしてなんの抵抗もなく農業を選択したかにみえる若い農業後継者たち…。まさに時代は動いているという実感を覚えました。一緒に取材した（佐）に感想を尋ねると「夫婦でいつも一緒にいられるのがいいと思った」と言つた。私は黙つてうなずいた。（斎）

★今年も町内の長寿番付ができました。最高齢者の加藤嘉七さんは今年で九十九歳を迎えます。町内初の百歳まであと少しの加藤さんですが百年の間に経験したこととは数え切れないとおもいます。わたしは今年二十三歳になったのですが、加藤さんはそのころ東京で、関東大震災を経験したそうです。百歳まで生きるということの偉大さを感じました。

こちら
編集室